

特攻をめぐる一考察

なぜ、特攻隊が生まれたのか。なにが日本人に特攻を可能としたのであろうか？
特攻攻撃に対する陸海軍の評価の相違、特攻攻撃の効果、諸外国での評価等に論及する。

文・平間洋一



大尉丸行眞顔写真新聞。昭和19年10月29日付の新聞。特攻隊の艦隊

はじめに

日露戦争のときの旅順港閉塞戦、太平洋戦争開戦時の特殊潜水艇によるハワイ攻撃など、死を覚悟した特別攻撃はそれ以前にもあったし、「斃れてのちやむ」の精神から被弾後に敵艦に突っ込んで自爆した例は枚挙にいとまがない。しかし、太平洋戦争に示された日本人の戦いのなかで、際立った特色のひとつが「特攻」と「玉砕」であり、とくに切迫した戦局の最後の切り札として生まれたものが、完全な自己犠牲の「特攻」であった。諸外国においても体当たり攻撃を行なった事例はあったが、日本のように体当たり攻撃を組

織的に部隊単位で実行することはなかった。それは、なぜ、特攻隊が生まれたのであろうか。なにが日本人に特攻を可能としたのであろうか。どうして、陸海軍のあいだに特攻作戦の実施や評価をめぐって相違が生じたのであろうか。また、その効果や諸外国における評価はどのようなものであろうか。

特攻隊の誕生

最初に死を前提とする特攻攻撃を命じられたのは関行男大尉であった。そして、最初に特攻を命じたのは「海軍航空育ての親」といわれた第一航空艦隊司令長官の大西瀧治郎中將であった。

大西中将が第一航空艦隊司令長官に任命されたのは、敗色が濃くなった昭和一九年（一九四一）一月一七日で、大西中将がマニラに着任した二日後の一月一九日には米軍のレイテ島上陸が始まり、二〇日に「現戦局に鑑み艦上戦闘機二四機（現有総兵力をもちて体当たり攻撃隊（体当たり機一四機）を編成する」「本攻撃隊を神風特別攻撃隊と呼称する」との組織的特攻が命じられた。そして二五日にはマバラカット飛行場から大西中将の命令により編成された一七機の「神風特別攻撃隊」と呼ばれる「十死零生」の特攻隊が飛び立った。

この特攻攻撃について大西中将は、「特攻をやろうがやるまいが、いま攻撃に行けばみな生きては帰れない。特攻をしなければ成果も知られないまま死ぬ。特攻をやれば確実に自

分が成果をあげたと知って死ぬ。これすなわち大慈悲なんだ」と語っているが、中將は特攻が非道、無謀な攻撃法であり、人命の尊厳を無視した暴挙であることを、誰よりもよく知っていた。それにもかかわらず、大西中将は「特攻隊の創設者」といわれ、「愚将」「暴将」という汚名をええられている。

しかし、特攻隊の創設者で大西中将個人に帰するのは早計であるように思われる。そもそも、特攻を最初に提案したのは、侍従武官から空母千代田艦長に着任した城英一郎大佐であった。特攻作戦が始まる四か月前のマリアナ沖海戦に参加し、日本の航空兵力の差を痛いほど知った城大佐は、昭和一九年六月二九日に航空本部総務部長であった大西中将に「もはや通常の戦法で優勢な敵の空母を沈めることは望めない。すみやかに体当たり攻撃を目的とする特別攻撃隊を編成し、小官をその指揮官にされた」と具申しした。

しかし大西中将は、この具申に「未ダソノ時期ニ非ズトテ全幅賛成ヲ与ヘラレ」なかった。また、昭和一九年二月（あるいは一九九年初頭ともいわれる）には、軍令部総長永野修身大將から「それはいかん」と却下されたが、特殊潜水艇甲標的の乗員である黒木博司中尉、仁科関夫少尉から甲標的による特攻攻撃の嘆願書が提出されていた。

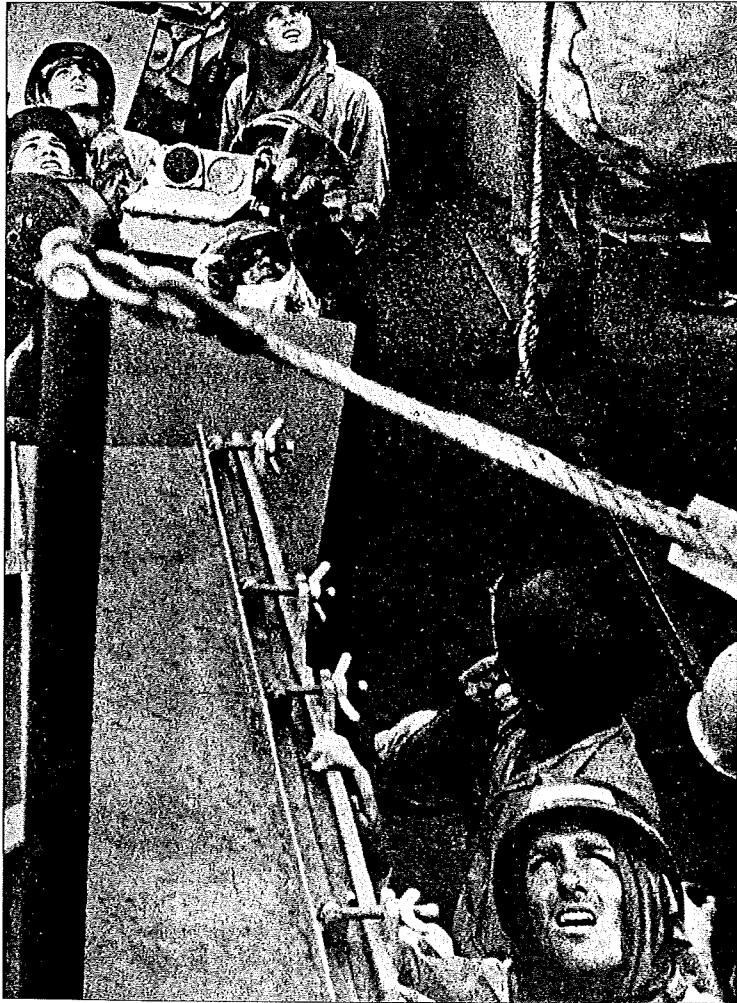
昭和一九年に入ると、六月には館山の第二四一航空隊司令の岡村基春大佐から、第一航空艦隊司令長官の福留繁中將に「尋常一様の戦法では現有航空兵力を生かす道はない」と体当たり攻撃が具申された。続いて七月一日の閣議で、軍令部第一部長の黒島龜人大佐が、今後は「必死必殺戦法」により長期不敗態勢を確立すべきであると主張し、一九年一月には呉海軍工廠魚雷実験部に回天の製造が下令され、九月初旬には桜花の一号機が完成。九月末には桜花を搭載する第七二二航空隊が編成されて、岡村基春大佐が指揮官に発令された。

さらに大西中将がワイリピンに到着する二日前の一月一七日には、クラーク基地から第二十六航空隊司令官有馬正次少將（のち中將）が、少將の階級章を外し双眼鏡の司令官の文字を消し、「自分自ら必殺の特攻となつて、その範を示す。希わくは志ある後輩、我に続きこの危急存亡にあたり護国の大任を果たされんことを望む」との言葉を残して、突如一番機に搭乗して発進。死をもって体当たり攻撃の必要性を示していた。

このように特攻戦法は、海軍部内に自然発生的に芽生えた思想であり、この意味から特攻作戦に踏み切るため、海軍航空育ての親としての大西中将が選ばれたにすぎないといえよう。

特攻隊と陸海軍

最初に特攻を口にした城大佐は、まさに関大尉を長とする最初の特別攻撃隊が発進した昭和一九年一月二五日、ハルゼー艦隊を北方に引きつける「四」艦隊の空母千代田艦長としてレイテ海戦で艦と運命をともにした。また、第五航空艦隊司令長官の宇垣纏中將は終戦後に沖縄に向かい自ら最後の特攻攻撃に



特攻機を不安げに見守る米艦乗組員。「カミカゼ」は物理的被害以上に恐怖感による心理的傷害を米兵たちに与えた。

六日、第七潜水戦隊司令官大和田昇少將の指示を受けた同戦隊の主務係藤原雅爾中佐と、呂号第三百十三潜水艦長渡辺久大尉から海軍大臣嶋田繁太郎大將に、今後は潜水艦に特攻兵器を搭載し特攻作戦に徹すべきであり、そのために特攻専門の潜水艦隊を創設すべきであ

ると上申され、さらに八月には第四〇五航空隊の太田光雄特務少尉から、一式陸攻の胴体の下に小型体当たり機を搭載する戦法が具申された。

一方、海軍中央でも昭和一八年八月二日に開かれた第二段作戦に應ずる戦備方針をめぐ

* 回天=かいてん、93式酸素魚雷を改造し乗員1名が操縦する有人魚雷、後に乗員2名の拡大性能向上型が作られた。
* 桜花=おうか、機首に爆薬1,200キロを搭載したロケット推進の特攻機、戦場では一式陸攻の懸吊機した。

表3 戦後の調査による特攻隊の戦果

	正規空母	護衛空母	戦艦	巡洋艦	駆逐艦	護衛駆逐艦	水上機母艦
撃沈	0	3	0	0	13	2	0
撃破	16	20	11	11	84	24	5

	掃海艦艇	敷設艦	輸送船	上陸用舟艇	補給艦	その他	合計
撃沈	3	0	4	12	5	7	49
撃破	26	10	27	19	2	16	271

表2 日本海軍発表の特攻隊の戦果

	撃沈	撃破
空母	17	58
戦艦	19	19
巡洋艦	34	34
駆逐艦	16	22
艦種不詳	43	83
合計	129	216

表1 陸軍航空部隊の配備

配備地域	配備飛行隊数	配備比率
満州	36	19.7%
中国	51	27.9%
南西太平洋	38	20.7%
南東太平洋	34	18.6%

陸軍特攻隊「振武隊」の隊員。報道カメラマンの注文に応じたものだろうが、日の丸に書かれた「殉皇至誠」の文字を見つめている。



散った。さらに桜花特別攻撃隊の司令であった岡村大佐は鹿屋から桜花隊を沖縄に発進させていたが、終戦の報を聞くと部下のあとを追うのを自決した。

一方、特攻作戦を命じた大西中将は終戦が決せられ、天皇の玉音放送がある翌、翌二六日午前二時四十分、「特攻隊の英霊に曰す。善く戦ひて散華せり。しかれどもその信念はついに達成し得ざるに至れり、われ死をもつて旧部下の英霊とその遺族に謝さんとす」との遺書と、「これでよし百万年の仮寝かな」との辞世を残して割腹し、部下のあとを追って自決した。

このように海軍の特攻は一応は伝統的統率である「指揮官先頭単縦陣」を実証し、その指揮官や体当たり攻撃を具申した者が、一部の中間指揮官を除き、いずれも部下のあとを追うなど統率上の問題は少なかった。また、海軍の特攻は「あの戦局ではやむを得なかった」との戦局への認識があり、さらに、海軍には沈めばもうととの同族意識が強かった。

特攻隊の成果

その大部分が基地に引き返したという。太平洋戦争中に日本が投入した特攻機の機数については、諸説があるが約二四〇〇機で隊員は三八六三名、これに回天や震洋（陸軍ではレトと呼称）などを加えれば六九五二名（この数値は、陸軍のレ艇は含まれていない）であった。そして、日本海軍はこれらの特攻攻撃による戦果を「過大戦果」という認識があったようだが、「表2」のように一二九隻を撃沈し、二二六隻を撃破したと推定し軍艦マーチとともに発表していた。しかし、戦後の調査によれば「表3」のとおりで実際の戦果とは大差があった。

このように記録が異なるのは、当事者がこごとく戦死していることに加えて、特攻隊が生まれた当時の戦況がきわめて不利な状況で戦果の確証が困難であったこと、攻撃を受けたアメリカ側も混乱し通常の攻撃による被害が、特攻機によるものかの記録が不完全なことなども考えられる。一面、戦争中の過大な戦果判定には、特攻隊隊員の死を少しでも無為にしたくないとの感情が働いたのであろう。一方、水上特攻の海軍の震洋、陸軍のレ艇の成果はさらに少ない。

デニス・ペギー・ウォーカー著「ドクニメント 神風」によれば、一四〇隻から一四五隻の水上特攻艇が攻撃に参加したが、撃沈に至ったのは大型上陸用舟艇八隻だけ。そのほか駆逐艦四隻、戦車揚陸艦二隻、貨物船一隻を大破し、駆逐艦二隻、戦車揚陸艦二隻、貨

連打倒が明確になったならばソ連を攻撃しようし、陸軍の航空部隊は「表1」に示すとおり、満州および中国に保有飛行隊の四七・六パーセントを配備していた。そして南東太平洋方面の優勢な米軍と対峙しているのは三四個中隊で、全航空部隊の一八・六パーセントにすぎず、性能や投量劣る中国やイギリス空軍を相手とし、米軍と戦う機会が少なかった。陸軍には戦局に対する切迫感がなかった。

そのうえ、陸軍には特攻実施に賛同しない指揮官、幕僚もかなり多く、陸軍の特攻出撃は海軍に刺激され、トップ・ダウンで実施されることになった。

陸軍は昭和一九年三月、特攻作戦に反対している航空総監兼航空本部長の安田武雄中将を外し、軍事参議官兼多摩陸軍技術研究所所長に補職し、その後任に参謀次長の後宮淳大將を、次長には航空出身の菅原道大中將を発令。そして一〇月四日には特攻実施を大本営から下達した。

しかし、陸軍にはミス人事が重なってしまつた。マリアナ沖海戦に敗北し、サイパンを失つて東條内閣が倒れると、杉山元参謀長から航空部隊の経験のない富永恭次中将が、「フイリビンの航空部隊の士気が大変緩んでいる。君が行つて大いに鞭撻する必要がある」と、八月三〇日にフイリビンにあった陸軍第四航空軍司令官に任命された。しかし富永本人も、着任二か月後には特攻隊の編成が命じられ、富永中将が特攻隊指揮官になつてし

物船など二隻、歩兵上陸艇一隻に軽微な損害を与えたにすぎない。水中特攻の回天による戦果はさらに少なく、沈没は油槽艦「ミシネワ」駆逐艦「アンダーソン」の二隻であり、輸送船二隻がかりを負わされた程度であつたとしている。

特攻攻撃全体の戦果はこのように少なかった。それでも米海軍が有効な対処法を確立できなかった初期には大きな損害を与えている。関大尉など一四機の突入攻撃を受けた際は護衛空母「セントロー」が沈没し、護衛空母三隻が大被害、一隻が小被害を受けて搭載していた航空機二八機が破壊され戦死、行方不明一五〇〇名、戦傷者二二〇〇名を出して艦艇乗員に深刻な恐怖を与えた。あまりにも大きな損害と恐怖に陥つた米海軍は特攻に関する新聞報道を禁止したという。

特攻隊攻撃のすさまじさを昭和二〇年一月六日のリンガエンへの上陸部隊に求めると、特攻機の命中状況は次のとおり暇なく激烈なものであつた（この部隊に対する攻撃は第二〇、第二二、第三金剛部隊であつた）。

- 一一〇〇 掃海駆逐艦「ロンダ」 一機命中
- 一一二二 駆逐艦「アリ」 一機命中
- 一一五九 戦艦「ニューメキシコ」 一機命中
- 一一〇〇 駆逐艦「ウォーク」 一機命中
- 一一〇六 駆逐艦「サムナー」 一機命中
- 一一〇八 巡洋艦「オーストラリア」 一機命中
- 一一〇九 戦艦「モシストラー」 一機命中
- 一一二五 掃海駆逐艦「ロンダ」 一機命中
- 一一〇〇 同 輸送駆逐艦「ブルックス」 一機命中
- 一一〇六 戦艦「ニューメキシコ」 一機命中

特攻隊をめぐる評価と非難

米軍は特攻機の桜花を「バカ・ボム（馬鹿な爆弾）」と命名するなど、特攻戦法に関する理解は薄く、その評価も一般に低い。森本忠夫は著書「特攻」外道の統率と人間の条件」において、「特攻」日本の未期の戦備体系と戦力構造が特殊な日本軍国主義「デオロギー」と合成されて生み出された近代思想体系上、日本人以外には誰もかみずからには決して許容できない異端の「パラダイムであつた」と述べている。

また、日本で出版された特攻隊に関する本はおびただしいものがあるが、多くは否定的であり、特攻をあえて命じた指揮官たちを痛烈に非難し、無誘で狂気の沙汰と断定している。たしかに特攻戦法は非合理的かつ無謀であり、その非難は論理的に妥当であつて反論の余地はない。

しかし、フランス人のベルナル・ミローは「特攻隊（原題名「Epopée kamikaze 英雄 神風」）において、特攻隊を「われわれ西洋人は突つたり、哀れんだりしていいものであろうか。むしろそれは偉大な純真性の発露ではなかつたらうか。われわれ西欧人は戦術的自殺行動という観念を認容することはできないが、日本の特攻隊志願者に無感動のままにしていることも到底できない。彼らを活気づけていた理論がどうであれ、彼らの勇氣、決意、自己犠牲には感動を禁じ得ないし、また禁すべきではない。彼らがとつた手段があまりにも過剰で、かつ恐ろしいものだったに

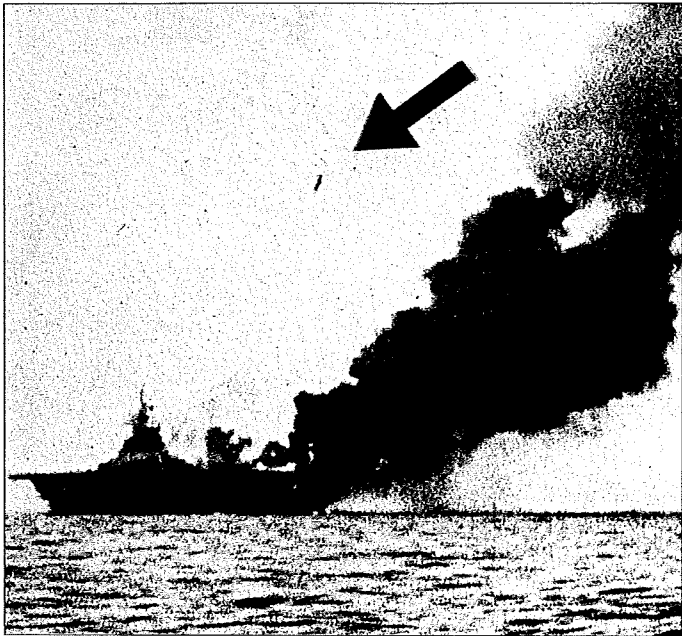
まつた。また富永中将はフイリビンに米軍が上陸すると、部下を置き去りにして台湾に逃避してしまつた。このため陸軍は昭和二〇年二月に富永中将を待命とし、五月には予備役としたが、このミス人事に加え、陸軍には特攻実施部隊の選定にも問題があつた。

陸軍が最初に内地の部隊に特攻出撃を命じたのは昭和一九年一〇月四日であつたが、それは全力をあげて艦艇攻撃訓練を実施中の銚田教導飛行師団であつた。

そして、指揮官の今西二郎少将自身は、「体当たり部隊の編成は士気の保持が困難で統御に困り、かえつて戦力が低下するだろう。この種の決死隊は第一線で情勢が真に緊迫して、皇國の興廃がこの一戦にあることを將兵一同が認識したときに、下部から盛り上がる氣勢をたくみにとらえて自然に結成された殉国の決意によつて結成されるのが適当であり、内地部隊として常時編成しておく性質のものではない」と反対であつた。また艦船攻撃訓練中の隊員には、武運に恵まれれば何回も攻撃して戦果を上げ得るのに、なぜ特攻をしなければならぬかとの疑問があつた。

このような状況のため、陸軍では特攻隊の隊員に指定された者のうち三分の一は最初から希望していなかった。そのため昭和二〇年五月六日に至つても、知覧基地では三機の特攻機が準備されたが、実際に飛び立つたのは四割弱の一三機であり、一日の場合には知覧・都城東基地に準備された八〇機中、戦場に向かつたのは半数以下の三六機しかも、

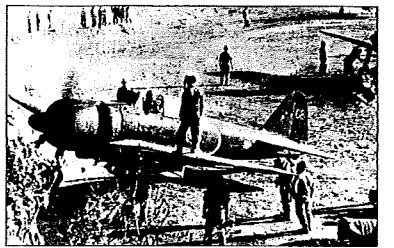
*震洋=しんよう、排水量1.4トン、全長5.1メートル、速力23ノットのモーターボートの艇首に250キロの爆薬を搭載した水上特攻兵器。
*パラダイム=paradigm、社会の枠組み、社会の価値観。



沖繩攻略作戦中の空母バンカーヒルに急降下する特攻機(流星艦爆=矢印)。同空母はすでに他の特攻機により黒煙を噴き上げている。



昭和19年10月25日、比島マバラカット基地における出撃前の海軍特攻隊「敷島隊」の隊員たち。左端の飛行服姿が関行男大尉。



前述のベルナル・ミローは、特攻隊について「本質的特質は、この行動を成就するために決行に先んじて、数日前に時としては数週間、数か月も前から、あらかじめその決心がなされているという点にある。」そして、この特殊な点こそが、われわれ西洋人にもっとも受け入れがたい点である。われわれの精神にとっては、そのようなことは思いもつかぬことであり、絶対にあり得ないことであると述べている。しかし、これは自殺を禁

特攻隊と国民性

しても、これら日本の英雄たちは、この世界に純粋性の偉大さというものについて教訓を与えてくれた。彼等は二〇〇〇年の遠い昔から今日に、人間の偉大さというすでに忘れられてしまった使命を、取り出して見せてくれたのである」と述べている。

さらにまた、関大尉が最初に悲劇的な特攻出撃を開始したマバラカット飛行場に特攻隊慰霊碑を建立したのは日本人ではなかった。それは反日感情の強いフィリピンのマバラカット町民などのフィリピン人であった。画家で歴史協会員であるダニエル・H・デイソンは、猪口力平・中島正の書いた「神風特別攻撃隊(彙誌)」を読み、「この書を熟読し祖国愛に燃えて散華した若い特攻隊員に思いをはせるとき、感激の涙を禁じ得なかった。かれらは永遠に記憶されるべきであると確信する」と、特攻隊の祖国愛に対する国境を超えた普遍的な尊敬の念を表し、記念碑を自費で建立した。

じたキリスト教徒の道徳規範によるものではないだろうか。現にパレスチナゲリラは航空機のハイジャック、テルアビブ空港小銃乱射事件、レイバンのアメリカ海兵隊司令部への自動車爆弾での突入など、特攻的「十死零生」の自殺攻撃をくり返している。この点から、特攻戦法が日本民族だけに特有なものではないともいえる。

それでは、アラブ人たちにはなぜ、特攻ができるのであろうか。それはアラブ人の風土から生まれた日本人と共通する強固な部族意識と、その死生観・宗教観にあるように思われる。アラブ人はもともと乾いた不毛の砂漠を生活空間とし、昼間は五〇度を超す灼熱の酷烈な自然風土のなかで、オアシスをめぐる闘いに勝たなければ水が得られず、戦いに敗ればその瞬間に死と対決しなければならなかった。このようなオアシスをめぐる争いから連帯共同体としての強力な仲間意識、部族としての強固な団結が生まれた。そして、それが宗教にまで昇華した。すなわち、回教II イスラムという言葉は「献身」を意味し、聖典コーランでは「ジハード(聖戦)」という形で戦争を義務のひとつと取り上げ、転進と合流以外の目的に敵に背中を向けるものはアラブ人の怒りを買ひ、地獄に落ちると脅かす一方、アラブのために戦死者は、たとえ死んでも素晴らしい褒美が授けられ、死後にはアラブのそばに養われて生きるので死者とは考えられないと教えている。この仏教に通じる「死後の楽園」思想はアラブ人の死への恐怖を取り除き、イスラム兵士の勇気を鼓舞し、ここ

にパレスチナゲリラが「十死零生」のテロ攻撃をくり返す原動力となっているのではないであらうか。

しかし、この特攻がアラブゲリラと大きく異なる点は、日本では特攻作戦が計画的組織的に部隊として実施されたことであり、しかも特攻戦法に対する兵器さえ製造されたことであらう。すなわち、ガダルカナルからの撤退など戦局が不利に展開し始め、対米戦力の格段の開きが現実のものとなった昭和十八年初期に、軍司令部から海軍省に次のような兵器(機保持上「金物」と呼称した)の緊急実験要請が提出された。

- 1 金物 潜水艦攻撃用潜航艇
- 2 金物 対空攻撃用兵器
- 3 金物 S金物(のちの海龍、および可潜水魚雷艇)
- 4 金物 船外機付衝撃艇(のちの震洋)
- 5 金物 自走爆雷
- 6 金物 人間魚雷(のちの回天)
- 7 金物 電探等
- 8 金物 電探防止
- 9 金物 特攻部隊用兵器(のちの震龍)

そして、翌昭和十九年二月には極秘に6金物(回天)の試作が呉海軍工廠魚雷実験部に命じられ、七月一日には「特殊兵器緊急整備計画」が立案され、八月には特攻機桜花(A部品と呼称)の設計試作が開始され、九月には海軍特攻部が設置された。年末ごろには「一億特攻ノ戦ニ必勝策ヲ急速具現ヲ目指す」一億特攻の精神のもとに、特攻兵器が日本海軍の正面装備へと変化してい

った。

そして、水上特攻艇「震洋(略称マル四艇)」を約六〇〇隻、水中特攻兵器の「回天(略称マル六兵器)」約四二〇隻、魚雷二本または艇首に爆薬を装備した有翼小型潜航艇「海龍(略称SS金物)」約一〇〇隻、「甲標的」約二二〇隻と、これを大型にした「蚊龍」約二二〇隻、敵艦の艦底に爆薬を固着す

る小型潜航艇「震龍(略称マル九金物)」、潜水服を着用した隊員が停泊中の敵の艦艇を棒地雷によって爆破させる「伏龍」、さらにロケット機「桜花」などの航空特攻兵器が生産されたのであった。

ところで、日本人に「特攻」実施を可能とさせたものはなにかであったのであろうか。特攻作戦開始の契機となった第一は、前述のとおり手持ち兵力三九機で空母約二〇隻、航空機約一〇〇〇機にのぼるアメリカの機動部隊に対処しなければならなかった絶対的な兵力の不足にあった。しかし、国民性という視点から見ると、特攻作戦を可能とした精神的背景は、稲作民族の体質から生まれた大家族主義にとりも強い愛国心、武士道の影響、戦陣訓に表徴される教育、また、特攻隊への志願には他人の評価を過度に意識する世間体という拒否・選択を許さぬ「ムラ」社会の「恥」意識などが加わったのではないだろうか。そして、それが隊員の三分の一が希望していなかったにもかかわらず、乗機もろとも体当たりする「十死零生」の特攻隊に若人

たちを、自分の意志に反して志願させたのではなかったのだろうか。

おわりに

ところで、日本人は将来再び特攻などを行なうのであろうか。この疑問に私の回答は肯定的とならざるを得ない。戦後、アメリカによって行なわれた日本の戦後改革は、日本人の価値観を大幅に変え、平和に対する価値観は国民すべてに共有され、軍人すなわち軍国主

義の悪者との固定観念が国民を支配するに至った。しかし、戦後の日本人の思想を揺るがした大改革にもかかわらず、その深層心理や思想は不変のように思われる。現在でも至るところに見られる同窓会への求心、会社への忠誠心など、日本民族の原点である「ムラ」社会が存在し、たまたムードやスローガンに左右され、「単独講和反対」「安保反対」「PKO反対」と感情的にムードのみに反応する集団ヒステリー現象に左右されてきた戦後政治の流れを見ると、著者は、状況が変われば、また日本人はムードに流され「やるしかない」をモットーに、再び特攻隊に参加する若者が激増するよう思われてならない。かつて日本は世界に通用しない日本を家長とした大アジア主義の「八紘一宇」(アジヤ人のアジア)の「大東亜共栄圏」を唱え、この「八紘一宇」という「悠久の大義」に殉じたが、日本人は急激な状況の変化に対応できず、かたくなに自己の価値観にこだわり、情緒やムードに流されながら自分は全く論理的だと信じて、絶対的にその非を認めなかった。また、かつてドイツの電撃的勝利に「大転換必至の帝国外交」、「外交一新の要請は国民的信念にまで高揚」と日本を二国同盟のパスに乗せてしまった新聞の煽り現象も消えていない。このように理性に欠けムードに弱いヒステリックな国民性が改まらぬかぎり、日本人は自己の価値観にこだわり、ときのムードに流され、再び「神風特攻隊」になり、「一億玉碎」となるように思われてならない。

(ひらまやういち 防衛大学校教授)